

かなでほんちゅうしんぐら

## 仮名手本忠臣蔵

### 〔解説〕

寛延元年（一七四八）八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛（しようらく）・並木千柳（なみきせんりゅう）の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気が高かった。言うまでもなく赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられている。

元禄十四年（一七〇一）三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色である。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治（えんや）判官、吉良上野介を高師直（もろのう）、大石内蔵助を大星由良之助（ゆらのすけ）などと、太平記の世界をとってつけており、また、それは幕府の検閲を逃れるための手段でもあった。

本筋の義士劇の他に、若狭之助、本蔵、勘平、天河屋（あまかわや）の件が発生し、世話場・道行等を交え、もっぱら首尾を整えている。討入りの事実と戯曲的内容を巧妙に一致させた名曲である。

「あらずじ」

## 《大序》

〔兜改めの段〕暦応元年（一三三八）二月下旬、鶴ヶ丘八幡宮の造営が成就したので、足利將軍尊氏の弟・直義は、兄の代参として鎌倉へ下向、新田義貞が討死の時に着用していた兜を宝蔵に納めることになった。塩冶判官の妻、顔世が召され、四十七の兜のうちより、義貞のものを見分ける。直義と、このたびの響応役、塩冶判官・桃井若狭之助は、兜を宝蔵に納めに行く。

〔恋歌の段〕後に残った指南役、高師直は、艶書を渡して顔世を口説くが、戻ってきた若狭之助の機転により、顔世はその場を逃れることができた。怒った師直は若狭之助を罵倒、若狭之助はかろうじて憤りを抑える。

## 《二段目》

正七つ時（午前四時）の登城に先がけ、西の御門で師直に追いついた本蔵は、進物を山と並べて首尾よく師直の機嫌を取り結ぶ。師直の勧めで本蔵も門内に入る。やや遅れて、塩冶判官が早野勘平を供に登城。腰元おかるは、顔世から師直への文箱を届けに来る。勘平は判官から師直に渡せばよいと、おかるを待たせて奥に入る。

〔殿中刃傷の段〕「おのれ師直、真二つ」と意気こむ若狭之助の前に現れた師直は、前日とはうって変わって低姿勢。金が言わせた追従とは夢にも知らぬ若狭之助は、すっかり拍子抜けして、刀を抜くことができなかつた。

その後、判官がやってきて顔世からの文箱を師直に手渡すと、中には新古今和歌集の歌。師直は恋のかなわぬし

るしと悟り、判官に散々当てこすりを言う。判官は腹にすえかね、師直に斬りつけてしまう。判官を抱きとめたのは、次の間に控えていた本蔵であった。

館の騒動に、勘平は急ぎ裏門へ。判官が閉門を仰せつけられ、網乗物にて帰ったと聞き、動顛する。おかるとの逢瀬を楽しんで、主人の大事に居合わせなかったことを恥じ、切腹しようとするが、おかるに止められ、おかるの在所、山崎へと落ちてゆく。

#### 《四段目》

〔判官切腹の段〕 閉門中の判官の館では、顔世御前と大星力弥が、判官の心を慰めようと、花を飾っている。そこへ上使、石堂馬之丞と薬師寺次郎左衛門が「国郡を没収し、切腹」との上意を伝えに来る。かねて覚悟していた判官が、刀を腹へ突き立てたところへ、国家老、大星由良之助が駆けつける。判官は「この九寸五分は汝へ形見、我が鬱憤を晴らさせよ」と息絶える。

家来一同は、亡骸を菩提寺光明寺へと送り、斧九太夫ら不忠の者を除いて仇討ちの盟約をして城を明け渡す。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

## 大序 兜改めの段

嘉肴かこうありといへども食せざればその味あじわいを知らずとは。国治まつてよき武士の忠も武勇も隠るゝに、たとへば星の昼見えず夜は乱れて現はるゝ、ためしをこゝに仮名書の太平の代の政。頃は暦応元年二月下旬。足利將軍尊氏公。新田義貞を討ち亡し、京都に御所を構へ、徳風四方にあまねく、万民草の如くにて靡き従ふ御威勢。国に羽をのす鶴が岡八幡宮御造宮成就し、御代参として御舍弟足利左兵衛督直義公鎌倉に下着なりければ、在鎌倉の執事高武蔵守師直御膝元に人を見下す権柄けんべい眼まなこ。御馳走の役人は桃井播磨守が弟、若狭助。伯州の城主塩治判官高定。馬場先に幕打廻し、威儀を正して相詰むる。直義公仰せ出ださるゝは

「いかに師直。この唐櫃に入れおきしは、兄尊氏に亡さ

れし新田義貞、後醍醐の天皇より賜つて着せし兜。敵ながらも義貞は清和源氏の嫡流、着棄の兜といひながらそのまゝにもうちおかれず。当社の御蔵に納める条、その心得あるべしとの厳命なり」

とのたまへば 武蔵守承り

「これは思ひもよらざる御事。新田が清和の末なりとて、着せし兜を尊敬せば、御旗下の大小名清和源氏はいくらもある。奉納の儀然るべからず候」と遠慮なく言上す。

「イヤさやうにては候まじ。この若狭助が存ずるは、これはまつたく尊氏公の御計略。新田に徒党の討ちもらされ、御仁徳を感じし、攻めずして降参さする御方便と存じ奉れば、無用との御評議卒爾なり」

といはせも果てず

「ヤア師直に向つて卒爾とは出過ぎたり。義貞討死し

たる時は大わらは。死骸のそばに落ち散つたる兜の数  
は四十七。どれがどうとも見知らぬ兜。さうであらうと  
思ふのを奉納したその後で、さうでなければ大きな恥。  
なま若輩な形なりをしてお尋ねもなき評議すつこんでおお  
やれ」

と御前よきまゝ出るまゝに杭とも思はぬ詞の大槌。打  
ち込まれてせき立つ色目。塩冶引取つて

「コハごもつともなる御評議ながら、桃井殿の申さる  
る治まる代の軍法。これ以て捨てられず、双方まつたき  
直義公の御賢慮仰ぎ奉る」

と申し上ぐれば、御機嫌あり。

「ホ、さいはんと思ひし故、所存あつて塩冶が婦妻を  
召し連れよと言付けし。これへ招け」

とありければ、

「は」

と答への程もなく、馬場の白砂、素足にて裾で庭掃く  
柄襦うちかけは、神の御前の玉箒。玉も欺く薄化粧。塩谷が妻の  
顔色御前は、はるか下つて畏る。女好きの師直、そのま  
ま声かけ

「塩冶殿の御内室顔世殿。最前よりさぞ待遠。御大儀御  
大儀。御前のお召し。近う〜」

と取持ち顔。直義御覧じ

「召出すこと外ならず。往時いんじ元弘の乱れに後醍醐帝都  
にて召されし兜を、義貞に賜つたれば、最期の時に着つ  
らんこと疑ひはなけれども、その兜を誰れあつて見知  
る人ほかになし。そのころは塩冶が妻、十二の内侍のそ  
の内にて、兵庫司の女官なりと聞き及ぶ。さぞ見知りあ  
らんず。覚えあらば兜の木阿弥、目利き〜」

と女には、厳命さへも和らかに、お受け申すもまたなよ  
やか。

「冥加にあまり君の仰せ。それこそ私が明け暮れ手馴れし御着の兜。義貞殿拝領にて、蘭奢待らんじやたいといふ名香を添へて賜はる。御取次はすなわち顔世。そのときの勅答には、人は一代名は未代、すは討死せん時、その蘭奢待を思ふまま、内兜にたきしめ着るならば、鬢の髪に香を留めて、名香かほる首取りしといふ者あらば、義貞が最期と思召されよとの詞はよもや違ふまじ」

と申し上げたる口もとに、下心ある師直は、小鼻いからし聞きみたる。直義詳しく聞し召し

「ホ、ウ 審つまびらかなる顔世が返答。さあらんと思ひし故、落ち散つたる兜四十七、この唐櫃に入れ置いたり。見分  
けせよ」

と御詫意の、下侍、屈むる腰の海老錠を、あける間遅しと取り出すを、おめず臆せず立寄つて、見れば所も名にし負ふ、鎌倉山の星兜。とつばい頭、獅子頭、さて指物

は家々の流儀くによるぞかし。あるひは直平筋兜、鍔のなきは弓のため、その主々の好みとて、数々多きその中にも、五枚兜の竜頭これぞと言はぬその内に、ぱつと香りし名香は

「顔世が馴れし義貞の兜にてござ候」

とさし出せば、

「さやうならめ」

と一決し

「塩冶、桃井兩人は、宝蔵に納むべし。こなたへ来たれ」と御座を立ち、顔世にお暇給はりて段かづらを過ぎ給へば、塩冶、桃井兩人も打連れ

# 恋歌の段

てこそ入りにける。

あとに顔世はつぎほなく

「師直さまは今しばし、御苦勞ながらお役目をお仕舞あつて、お静かに。お暇の出たこの顔世、長居はおそれ、

さらば」

と立上る袖、すり寄つてじつと控へ

「コレマアお待ち待ち給へ。けふの御用仕舞次第そこもとへ推参してお目にかけるものがある。幸ひのよいところ召し出された。直義公はわがための結ぶの神。ご

存じの如く我れら歌道に心を寄せ、吉田の兼好を師範

と頼み日々の状通。そのもとへ届けくれよと問合せのこの書状、いかにもとのお返事は、口上でも苦しくない」

と袂から袂へ入るる結び文。顔に似合はぬ『様参る武蔵

あぶみ  
鏡』と書いたるを、見るよりはつと思へども

『はしたなう恥ぢしめてはかへつて夫の名の出ること。持ち帰つて夫に見せうか。いや／＼それでは塩谷殿、憎しと思ふ心から怪我過ちにもならうか』

と、ものを言はず投げ返す。人に、見せじと手に取上げ「戻すさへ手に触れたりと思ふにぞ、わが文ながら捨て置かれず。くどうは言はぬ。よい返事聞くまでは口

説いて／＼、口説きぬく。天下を立てうと伏せうともままな師直。塩谷を生けうと殺さうとも、顔世の心たつた一つ。なんとさうではあるまいか」と、聞くに顔世が返答も、涙ぐみたるばかりなり。折から来合はす若狭助。例の非道と見て取る氣転。

「顔世殿、まだ退出されぬか。お暇の出で暇取るは、かへつて上への畏れ。はやお帰り」

と追つ立つれば、

『彼奴きやつさては氣取りし』

と、弱味を食はぬ高師直。

「ヤア又しても言われぬ出過ぎ。立つてよければ身が立たす。このたびの役目、首尾よう勤めさせくれよと、塩谷が内証顔世の頼み、さうなくては叶わぬ筈。大名でさへあの通り。小心者に捨知行、誰が蔭で取らする。師直が口一つで御器提げうも知れぬ危い身代。それでも武士と思ふぢやまで」

と邪魔の返報憎て口。くわつとせきたつ若狭助、刀の鯉口砕くるほど握り、詰めは詰めたれども

『神前なり、御前なり』

と一旦の堪忍も、いま一言が生死の、詞の先手

「還御ぞ」

と、御先を払ふ声々に、せんかたなくも期を延ばす、無念は胸に忘れず。悪事さかつて運強く切られぬ高師

直を、明日はわが身の敵とも知らぬ塩谷が後押さへ。直義公は悠々と歩御ほぎよなり給ふ御威勢。人の兜の竜頭。御蔵に入るる数々も、四十七字のいろは分け、仮名の兜を和らげて、兜頭巾の綻びぬ国の、掟ぞ



### 三段目 殿中刃傷の段

行く空の

脇能過ぎて御樂屋に鼓の調べ太鼓の音、天下泰平繁昌の寿祝ふ直義公、御機嫌なゝめならざりける。若狭助はかねて待つ師直遅しと御殿の内、奥をうかがうふ長袴の紐しめくゝり気配りし、

『おのれ師直、真二つ』

と刀の鯉息をつめ、待つとも知らぬ師直主従遠見に見付け

「これはく若狭助殿。てさてお早い御登城。イヤハヤ我折りました。我ら閉口々々。いや閉口ついでに貴殿に言訳いたし、お詫び申すことがある」

と、両腰ぐはらりと投げ出し

「若狭助殿、改めて申さねばならぬ一通り。いつぞや鶴

が岡で拙者が申した過言、ヲ、お腹が立つたであろう。

もつともぢやく、がそこをお詫び。その時はどうやら

した詞の違ひでつい申した、我れら一生の粗忽。武士が

コレ手をさげる。真平く。仮令けりょうそのもとが物馴れたお

人なりやこそ、外ほかの狼狽者で見さつしやれ、この師

直真二つ、こわやのく。ありやうがこの節貴殿のうし

ろ影手を合わして拝みました。アハ、。ア、年寄ると

やくたいく。年に免じて御免々々。これさく武士が

刀を投げ出し手を合はす。これほどに申すのを聞き入

れぬ貴公でもないわさ。とかく幾重にも誤りく。コレ

サ珍才ともどもにお詫びく」

と、金が言はする追従とは夢にも知らぬ若狭助。力みし

腕も拍子抜け。いまさら抜くに抜かれもせず。寝刃合は

せし刀の手前、さしうつむきし思案顔。小柴の蔭には本

蔵が瞬きもせず守り居る。

「ナニ珍才、この塩谷はなぜ遅い。若狭助殿とはきつい違ひ。扱々不行儀者。いまにおいて面出しせぬ。主が主なれば家老で候とて諸事に細心のつく奴が一人もない。いざ〜若狭殿、御前へお供いたそ。サアお立ちなされ〜。いやさこれ師直めあやまつてをるぞ。コリヤこ、な粹め〜粹様め」

「イヤ若狭助最前からちと心悪うござる。マア先へ」

「何とした〜、腹痛か。コレサ珍才、お背中〜。お薬進ぜうかな」

「イヤ〜それほどにもござらぬ」

「然らば少しの内おくつろぎ。御前の首尾は我れらがよいやうに申し上ぐる。ソレ珍才一間へ御供申せ」

と、主従寄つてお手車に、迷惑ながら若狭助『これは』と思へど、是非なくも奥の一間へ入りければ

「ア、もう樂ぢや」

と本蔵は天を押し、お次の間にぞ控へ居る。ほどもあらず塩谷判官。御前へ通る長廊下。師直呼びかけ

「遅し〜。なんと心得てござる。今日は正七ツ時と先刻から申し渡したでないか」

「なるほど遅なりしは不調法。さりながら御前へ出るはまだ間もあらん」

と、袂より文箱取り出し

「最前手前の家来が貴公へお渡し申しくれよ、すなはち奥顔世方より参りし」

と、渡せば、受取り

「成程々々。イヤそこもとの御内方は扱々心がけござるわ。手前が和歌の道に心を寄するを聞き、添削を頼むとある。定めてそのことならん」

と押しひらき

「さなきだに重きが上の小夜衣、わがつまならぬつま

な重ねそ。ハアこれは新古今の歌。この古歌に添削とは

ム、ム、ム、

と思案の内

『わが恋のかなはぬしるし。さては夫に打ち明けし』

と思ふ怒りをさあらぬ体

「判官殿、この歌ご覧じたでござらう」

「イヤたゞいま見ました」

「ム、手前が読むのを、ア、貴殿の奥方はきつい貞女

でござる。ちよつと遣はさるゝ歌がこれぢや。つまなら

ぬつまな重ねそ。ア、貞女々々。そこもとはあやかり者

登城も遅なはる筈のこと。家にばかりへばりついてご

ざるによつて、御前の方はお構ひないぢや」

と、あてこする雑言過言。あちらの喧嘩の門違ひとは判

官さらに合点ゆかず、むつとせしが押し鎮め

「ハ、ハ、ハ、これは――師直殿には御酒機嫌か、御酒

参つたの」

「いつ盛らしやつた。イヤいつ呑みました。御酒下され

ても呑まいでも勤むるところはきつと勤むる。貴公は

なぜ遅かつたの。御酒参つたか。イヤサ内にへばりつい

でござつたか。貴殿より若狭助殿ア、格別勤められま

す。イヤまたそのものと奥方は貞女といひ御器量と申

し、手跡は見事。御自慢なされ。むつとされな、嘘では

ないはさ。今日御前にはお取込み。手前とても同然。そ

の中へ鼻毛らしい、イヤこれは手前が奥で歌でござる

などと。それほど内が大切なら御出御無用。総体貴様の

やうな、内にはかり居る者を井戸の鮎みなぢやといふ譬たとへ

がある。後学のため聞いておかつせ。かの鮎めがわづか

三尺か四尺の井の中を、天にも地にもないやうに思ふ

て、ふだん外を見る事がない。ところにかの井戸替へに

釣瓶について上ります。それを川へ放ちやると、なにが

内にばかり居る奴ぢやによつて喜んで途を失ひ、橋杭で鼻をうつて即座にぴりくくくくと死にまする。

サかの鮒めが。貴様も丁度その鮒と同じことだ。鮒よ鮒

よ、鮒だく、鮒武士だ」

「フウム」

「殿中だ」

「ハアくくく」

「ハハハハハ」

と出放題。判官腹に据えかね

「こりやこなた狂気召さつたか。イヤ気がちがふたか

師直」

「シヤこいつ武士をとらへて気違ひとは。出頭第一の

高師直」

「ム、すりや今の悪言は本性よな」

「くどいく、ガまた本性ならどうする」

「ム、オ、かうする」

と抜討ちに真向に切りつける眉間の大傷。『これは』と

沈む身のかはし、烏帽子の頭二つに切り、また切りかゝ

るを抜けつくぐりつ逃げ廻る折もあれ、お次に控へし

本蔵走り出て押しとゞめ

「コレ判官様御短慮」

と抱きとむるその隙に、師直は館をさしてこけつ転び

つ逃げ行けば

「おのれ師直真二つ。放せ本蔵放しやれ」

と、せり合ふ内、館も俄に騒ぎ出し、家中の諸武士、大

名小名押さへて刀もぎとるやら。師直を介抱やら、上を

下へと

## 四段目 判官切腹の段

浮世なれ。

塩谷判官閑居によつて扇ヶ谷の上屋敷、大竹にて門戸を閉ぢ、家中の外は出入を留め、事嚴重に見へにけり。

かゝる折にも花やかに奥は媚く女中の遊び、御台所顔なまめ

世御前。おそばには大星力弥、殿のお気を慰めんと、鎌

倉山の八重九重、色々桜花籠に活けらるゝ花よりも、生

ける人こそ花紅葉。柳の間の廊下を伝ひ、諸士頭原郷右

衛門。後につゞいて斧九太夫

「これはく力弥殿、早い御出仕」

「イヤそれがしも国許より親どもが参るまで昼夜相詰

め、まかりある」

「それは御奇特千万」

と郷右衛門、両手をつき

「今日、殿の御機嫌は如何お渡り遊ばさるゝ」

と申し上ぐれば、顔世御前

「ヲ、二人とも大儀々々、このたびは判官様お気詰り

に思召し、お失例しつらいでも出ようかと案じたとは格別。明け

暮れ築山の花盛り御覽じて御機嫌のよいお顔ばせ。そ

れ故にみづからもお慰みに差上げうと名ある桜を取寄

せて、見やる通りの花ごしらへ」

「ハ如何さまにも仰せの通り。花は開くものなれば、御

門も開き、閉門をお赦さるゝ古事の御趣向。拙者も何が

なと存ずれど、かやうなことの思ひつきは、イヤモ不調

法なる郷右衛門。ヤア肝心の事申し上げん。今日御上使

のお出でと承りしが、定めて殿の御閉門を御赦さるゝ

御上使ならん。なんと九太夫殿、さうは思召されぬか」

「ハ、ハ、コレサく郷右衛門殿。この花といふも

のも、当分人の目を喜ばすばかり。風が吹けば散り失せ

る。こなたの詞もまつその如く、人の心を喜ばさうとて、

武士に似合はぬぬらりくらりと後からはげる正月詞。

サ、なぜとお言やれ。このたび殿の御落度は、饗応もてなしの

御役儀を蒙りながら、執事たる人に手を負せ、館を騒が

せし科。軽うて流罪、重うて切腹。自体また師直公に

敵対てきとふは殿御不覚」

と聞きもあへず郷右衛門

「さてはその方、殿の流罪切腹を願はるゝか」

「イヤ願ひは致さぬ、願ひは致さねど詞を飾らず真実

を申すのぢや。もとはと言へば郷右衛門殿、こなたの

吝りんしよく嗇しはさから起こつたこと、金銀をもつて面つらを撲り

めさるれば、かやうなことは出来申さぬ」

と、巳が心に引当て、欲面よくづら打消す郷右衛門

「人に媚びへつらふは侍ではない。武士でない。なう力

弥。なんとさうではあるまいか」

と詞の角を、なだむる御台

「二人とも争ひ無用。このたび夫つまの御難儀なさる、もと

の起りはこの顔世。いづぞや鶴ヶ岡で饗応の折柄、道知

らずの師直、主のあるみづからに無体な恋を言ひかけ、

さまざまと口説きしが、恥を与へ懲りせんと、判官様に

も知らさず、歌の点に事よせ、さ小夜衣の歌を書き恥ぢ

しめてやつたれば、恋のかなはぬ意趣ばらしに判官様

に悪口あくぐち。もとより短気なお生れつき、え堪忍なされぬは

お道理でないかいの」

と、語りたまへば、郷右衛門、力弥とともに御主君の御

憤りを察し入り、心外面にあらはせり。

『はや御上使の御出で』

と玄関広間ひしめけば、奥へかくと通じさせ、御台所も

座を下り、皆々出迎ふ間もなく、入り来る上使は

石堂右馬丞いしどううまのじょう、師直が昵近じつきん薬師寺次郎左衛門、

「役目ならば罷り通る」

と会釈もなく上座につけば、一間の内より塩谷判官しづ／＼と立ち出で

「これは／＼御上使とあつて石堂殿、御苦勞千万。まづお盃の用意せよ、御上使の趣承り、いづれもと一献酌み積辭をはらし申さん」

「フ、それようござる。薬師寺もお相致さふ。したが上意を聞かれたら酒ものどへは通るまい」

と嘲笑へば右馬丞

「我々／＼今日上使に立つたるその趣、つぶさに承知せられよ」

と、懷中より御書取り出し押開けば、判官も積を改め、

承るその文言

「このたび塩谷判官高定。私の宿意を以て執事高師直を刃傷に及び、館を騒がせし利によつて、国郡を没収し

切腹申しつくるものなり」

聞くより『はつ』と驚く御台、並み居る諸士も顔見合せ、あきれはてたるばかりなり。判官動ずる気色もなく

「御上意の趣意細承知つかまつる。さてこれからは各々の御苦勞休めにうちくつろいで御酒一つ」

「コレ／＼判官だまり召され、その方が今度の科は縛り首にも及ぶべきところ、お上の慈悲をもつて、切腹仰せつけらるゝをありがたう思ひ、早速用意もすべき筈。殊にもつて切腹には定つた法のあるもの。それになんぞや、当世様の長羽織、ぞべらぞべらとしらるゝは酒興か。たゞし血迷うたか。上使に立つたる石堂殿、この薬師寺へ不作法」

と、きめつくれば、につこと笑ひ

「この判官酒興もせず、血迷ひもせぬ。今日上使と聞くよりも、かくあらんと期したる故、かねての覚悟見すべ

し」

と、大小羽織を脱ぎ捨つれば、下には用意の白小袖、無紋の上下死装束、みなくこれはと驚けば、薬師寺は言句も出でず、顔ふくらして閉口す。右馬丞さし寄つて

「御心底察し入る。即ち拙者検使の役、心静かに御覚悟」

「ハ、ア御親切かたじけなし。刃傷に及びしより、かくあらんとはかねての覚悟。恨むらくは館にて、加古川本蔵に抱き留められ、師直を討ちもらし、無念骨髓に通つて忘れがたし、湊川にて楠正成、最期の一念によつて生を引くと言ひし如く、生き替り、死に替り、鬱憤を晴らさん」

と、怒りの声ともろともに、お次の襖打ちたゞき

「一家中の者ども、殿の御存生ぞんじょうに御尊顔を拝したき願ひ。御前へ推参致さんや。郷右衛門殿お取次、郷右衛門

殿お取次」

と、家中の声々聞ければ、郷右衛門、御前に向ひ

「いかがはからひ候はん」

「フウもつともなる願ひなれども、由良助が参るまで無用々々」

はつとばかりに一間に向ひ

「聞かるゝ通りの御意なれば、一人も叶はぬ、くく」

諸士は返す詞もなく、一間もひつそとじづまりける。力弥御意をうけたまはり、かねて用意の切腹刀、御前に直すれば、心静かに肩衣取りのけ座をくつるげ

「力弥、々々」

「ハツくく」

「由良助は」

「いまだ参上つかまつりませぬ」

「フウ存生に对面せで残念。ハテ残り多やな。コレく

御検使。御見届け下さるべし」



と、三宝引き寄せ九寸五分押し頂くすんき

「力弥、々々」

「ハツ／＼」

「由良助は」

「いまだ参上つかまつりませぬ」

「是非に及ばぬ。これまで」

と、刀逆手に取り直し、弓手に突き立て引廻す。御台二  
た目と見もやらず、口に称名しょうみやう、目に涙。廊下の襖踏み  
ひらき、駆け込む大星由良助。主君のありさま見るより  
も

「ハツ／＼／＼ハア」

とばかりにどうと伏す。後に続いて千崎、矢間やひま、そのほ  
かの一家中ばら／＼と駆け入つたり。

「国家老大星由良助、たゞいま到着仕りました」

「ナニ国家老由良助とな。最期の対面苦しくない近う」

「ハツ」

「近う」

「ハ」

「近う、／＼、／＼」

「ハツ／＼／＼」

「ヤレ由良助、待ちかねたわいやい」

「ハ、ア、御存生の御尊顔を拝し、身にとつて何ほどか」

「ヲ、我も満足々々。定めて子細聞いたであらう。聞い  
たか。／＼。エ、無念。口惜しいわやい」

「ハ、ア委細承知仕る。この期に及び申上ぐる詞もな  
し。たゞ御最期の尋常を願はしう存じまする」

「ヲ、言ふにや及ぶ」

ともろ手をかけ、ぐつ／＼と引廻し、苦しき息をほつと  
つぎ

「由良助、この九寸五分は汝へ形見。我が鬱憤を晴らさ

せよ」

と、切先にてふえはね切り、血刀投出しうつぶせに、ど  
うど転び、息絶ゆれば、御台を始め、並み居る家中、眼  
を閉じ息をつめ、齒を食ひしぱり控ゆれば、由良助にじ  
り寄り、刀取り上げ押戴き、血に染まる切先を打守り、  
く、拳を握り、無念の涙はらく。判官の末期まっじの  
一句五臓六腑にしみわたり、さてこそ末世に大星が忠  
臣義心の名を上げし根ざしはかくと知られけり。